

小島 莉佳

風景体験における意識の対象の変化に関する研究

—『余白』体験モデルに基づく風景の探索実験を通して—

A Study on the Change of the Object of Consciousness in Landscape Experience

—Through a Landscape Exploration Experiment Based on the “Yohaku” Experience Model—

環境デザイン領域

第1章 はじめに

近年、都市空間における、人の主観的な体験の価値を改めて評価し、その重要性を示すため、様々な研究、取り組みが行われている。しかし、都市空間や場のより有効的な活用方法、居心地の良さの向上などを目的に、人の主観的な視点から、人の活動や利用実態を捉える研究や取り組みは多く見られるが、空間や風景を、人がどのように捉えているのかという点を主題として取り組まれている研究はあまり多くないように思う。そこで本研究は、風景探索実験によって、第三者の日常的な風景体験を抽出、そして、意識の対象の変化を探り、体験の質的把握を行うことを第一の目的とし、それによって、風景体験においてどのような事象を、主観的な視点によって捉えることが有効であるのかについて、示唆を得ることを第二の目的とする。

風景探索実験では、第三者の日常的な風景体験を抽出することを目的とするが、完全に純粋な、日常的な風景体験を抽出することは、実験として行う以上、不可能であると考え、事前に行った試験調査を参考にして、実験内容・手順を設定した。その結果、著者の学士論文にて作成した、7つの『『余白』体験』モデルを用いて実験を行うこととした。被験者に、各「『余白』体験」モデルの場の特徴を表した、7つのキーワード(「連続」、「繋がる」、「ひらく」、「越える」、「広がる」、「大きな場の中にいる」、「様々なものと同じ場所にいる」)を提示し、7つキーワードのうちいずれかに当てはまる風景を探索してもらう、というものである。被験者には、対象範囲内におけるスタート地点からゴール地点までを、1時間を目安に歩いてもらった。歩行条件を2点設けたが、その他は自由に歩いてもらった。実験では、①被験者が具体的に、どこを、あるいは、何を見ているのか、②見ている対象に対してどのような印象やイメージを抱くのか、③被験者自身がその際に抱く感情とその理由について、知るため、被験者には2点のことを依頼した。1点目は、見つけたキーワードに当てはまる風景をスマートフォンで撮影してもらうこと、2点目は、風景とその時の自分自身について、調査用紙に記入するこ

とである。また、後日、調査用紙に記入してもらった内容、キーワード、風景に対して抱く印象・イメージ、自分自身の感情、それぞれを選択した理由、調査後のアンケートの回答内容について、各被験者に対して、1～2回のヒアリングを実施した。

本研究における意識の対象とは、キーワード、風景に対して抱く印象・イメージ、自分自身の感情、それぞれを選択する根拠となった存在とする。そして、キーワードに当てはまる風景を抽出する段階から、抽出した風景に対する印象／イメージと、その時の被験者自身の感情を選択する段階には、時間的経過が生じていることを前提とし、本研究では、その間の意識の対象の変化を明らかにする。

次に、意識の対象の変化に関する評価・分類方法について、説明を記述する。意識の対象は、(ア)、(イ)の2つの項目((ア)意識の対象の属性、(イ)意識の対象の具体的な着目点、または、被験者に起こる変化・反応)について、(ア)→(イ)の順に、各被験者の、キーワード、風景に対して抱く印象・イメージ、自分自身の感情、それぞれを選択した理由を参考に、それぞれの該当する項目に分類する。項目(ア)意識の対象の属性は、空間、要素、その他の3種類である。項目(イ)意識の対象の具体的な着目点、または、被験者に起こる変化・反応は、意識の対象の具体的な着目点について分類する場合と、被験者に起こる変化・反応について分類する場合があり、意識の対象自体について、具体的に着目している時は前者の観点で評価・分類を行う。項目については、「空間」と「要素」で一部異なるが、「空間」は、印象／雰囲気、構成、状態、変化、対比、空間の要素、「要素」は、印象／イメージ、表層情報、状態、変化、対比、位置、と6項目ずつ存在する。被験者に起こる変化・反応について評価・分類する場合は、「空間」、「要素」共に、前述した意識の対象の具体的な着目点の分類に当てはまらない場合、つまり、対象に深く注目していない場合と、属性「その他」に分類される場合である。項目は17項目で、被験者に起こる変化・反応について、連想、懐古、想像、予感、共感、視野の変化、視

点の変化、身体感覚の変化(①可能性／願望、②代理経験、③実感)、自己との関連(①自分事化、②共通点、③再認識、④懐古、⑤回想、⑥好み、⑦興味／関心)である。また、項目(イ)について、特に言及がない場合は、評価・分類は行わない。評価・分類結果と、実験によって抽出したデータ、キーワード、イメージ・印象、感情を選択した理由は、被験者ごとに、各事例について表にまとめた。

第2章 各モデルの特徴の記述

全被験者の各事例における意識の対象の変化をモデルにし、それらを6つに類型化した。モデルは、基本、二段構造であり、上段は意識の対象の属性(項目(ア))と意識の対象の具体的な着目点(項目(イ))の変化を示す。下段は、被験者に起こる変化・反応(項目(イ))が起こる場合のみ、その変化を示す。類型は、①直接型、②単純変化型Ⅰ、③単純変化型Ⅱ、④単純変化型Ⅲ、⑤複雑変化型Ⅰ、⑥複雑変化型Ⅱの6類型である。また、単純変化型Ⅱは、単純変化型Ⅱ、単純変化型Ⅱ-1、単純変化型Ⅱ-2の3種類、単純変化型Ⅲは、単純変化型Ⅲ、単純変化型Ⅲ-1の2種類、複雑変化型Ⅰは、複雑変化型Ⅰ、複雑変化型Ⅰ-1の2種類存在する。全類型の意識の対象の変化モデルを一覧表としてまとめた(表1を参照)。

また、全事例を、風景探索実験で選択したキーワードごとに分類し、意識の対象の変化について整理して、特徴をまとめた。整理した結果を、キーワード間で比較すると、7つの中で最も選択されたキーワードは「繋がる」、該当事例数に対する、項目(イ)被験者に起こる変化・反応が起きた事例数が占める割合が最も高かったキーワードは、「越える」であることが分かった。また、キーワード選択時における、最も多かった意識の対象の属性の分布については、要素となったキーワードが4つ、空間となったキーワードが3つであり、大きな偏りは見られなかった。キーワードは全て場の特徴を示すものであるが、キーワードを選択した理由が要素である事例は、風景に対して抱く印象・イメージ、自分自身の感情の選択の段階で、空間・風景全体を捉えていた場合が多く、要素が被

験者に、空間・風景全体を意識させる働きをしている場合があるのではないかと考えた。このことから、人が風景を目の前にした時に、必ずしも初めから全体を捉えている訳ではなく、身近に在るヒトやモノから次第に空間・風景全体を捉えていることが分かった。

第3章 風景に対する被験者の反応の分析・考察

意識の対象の評価項目、項目(イ)被験者に起こる変化・反応、全17種類を、各被験者が選択したキーワード、風景に対する印象・イメージ、自分自身の感情、そしてその理由に基づいて、「思考の余白」、「身体感覚の余白」、「内的な余白」の3つのグループに分類した。被験者の思考と関連する変化・反応は「思考の余白」、被験者の身体感覚と関連する変化・反応は「身体感覚の余白」、被験者自身・被験者の内面と関連する変化・反応は「内的な余白」に分類した。また、これらの総称を「余白反応」とした。この章では、各変化・反応が起きている事例を幾つか例として取り上げ、被験者が選択したキー

ワード、風景に対する印象・イメージ、自分自身の感情、そして、選択した理由を参考に、余白反応が起こることで、結果的に、体験者が風景とどのように関わるようになったのかを考察した。「思考の余白」では、風景、あるいは、風景の中にある、被験者を惹きつけたり、被験者のこれまでの経験や得た知識と重なったりする特定の要素によって、被験者が風景に対して寄り添う事例が多く見られた。「身体感覚の余白」では、主に風景が、被験者の身体感覚の拡張をもたらし、それが結果的に、風景や被験者自身に対する、深い理解に繋がる事例が多く見られた。「内的な余白」では、被験者が、風景に自分自身を重ね合わせたり、風景と自分自身との共通点を見出したりするなど、風景を身近に感じていると受け取ることでできる行動や、自分自身を理解したり、心持ちを改めている事例が多く見られた。総じて、「余白反応」が起こることで、余白反応が起こる前よりも、被験者が風景を身近に感じるパターンと、主に「身体の余白」ではあるが、被験者自身に前向きな変化が起こるパターンの、2パターンが多

表1 意識の対象の変化モデル一覧

		モデル一覧				
①直接型	①-1 単数タイプ	①-2 複数タイプ	②-1前後異タイプ	②-2前後同タイプ	※1 ②-1については対象は1つ以上の場合もあり	
	要素	空間	(例) 要素	空間	要素	
	○	□	○	□	○	□
			○	□	○	□
			○	□	○	□
			○	□	○	□
③単純変化型Ⅱ	③-1	※1 対象は1つ以上の場合もあり ※2 変化・反応は1つ以上の場合もあり	③-2	③-3	※1 対象は1つ以上の場合もあり	
	(例) 要素		(例) 空間	(例) 要素	(例) 空間	
	○		□	○	□	
			○	□	○	□
			○	□	○	□
			○	□	○	□
④単純変化型Ⅲ	④-1	※1 対象は1つ以上の場合もあり ※2 変化・反応は1つ以上の場合もあり	④-2	④-3	※1 対象は1つ以上の場合もあり ※2 変化・反応は1つ以上の場合もあり	
	(例) 空間		(例) 空間	(例) 空間	(例) 要素	
	□		□	□	○	
			□	□	○	
			□	□	○	
			□	□	○	
⑤複雑変化型Ⅰ	⑤-1	※1 対象は1つ以上の場合もあり ※2 変化・反応は1つ以上の場合もあり	⑤-2	⑤-3	※1 対象は1つ以上の場合もあり ※2 変化・反応は1つ以上の場合もあり	
	(例) 要素		(例) 要素	(例) 要素	(例) 要素	
	○		○	○	○	
			○	○	○	
			○	○	○	
			○	○	○	
⑥複雑変化型Ⅱ	⑥-1	※1 対象は1つ以上の場合もあり ※2 変化・反応は1つ以上の場合もあり	⑥-2	⑥-3	※1 対象は1つ以上の場合もあり ※2 変化・反応は1つ以上の場合もあり	
	(例) 要素		(例) 要素	(例) 要素	(例) 空間	
	○		○	○	○	
			○	○	○	
			○	○	○	
			○	○	○	
【凡例】						
【意識の対象の属性】						
□ 空間						
○ 要素						
□○ 空間の要素						
【被験者に起こる変化・反応】						
● 連想、懐古、想像、予感、共感						
● 視野の変化、視点の変化、身体感覚の変化						
● 身体感覚の変化						
● 自己との関連						
● (①自分事化、②共通点、③再認識、④懐古、⑤回想、⑥好み、⑦興味／関心)						
【対象の変化を示す矢印】						
→ 意識の対象の属性に変化が生じる場合						
→ 意識の対象の着目点に変化が生じる場合						
→ 被験者に何らかの変化・反応が生じる場合						
【対象、変化・反応を複数示す記号】						
+						
・ 意識の対象が空間と要素の両方である場合						
・ 複数の対象が生じる変化・反応が複数存在する場合						
・ 意識の対象と被験者の変化・反応について同時系列						

く見られた。考察によって、「余白反応」が起こることで、風景体験者は、無意識でありながら、風景を自分事にして眺め、風景とより近く関わるようになる、ということができる。

第4章 まとめと今後の展望
3つの「余白反応」を抽出し、意識の対象の変化モデルを作成したことは、第三者の日常的な風景体験における質的把握をした結果であると結論づけることができ、本研究の第一の目的を達成したとすることができる。そして、本研究で被験者の意識の対象の変化を明らかにするため、意識の対象の評価・分類作業の過程で設定した評価・分類項目は、風景体験における、人の風景の捉え方を、詳細に把握することができ、本研究における第二の目的も達成することができた。今後の展望として、今回行った風景探索実験、意識の対象の変化の評価・分類項目を基盤として、都市における風景体験の主観的な質の抽出のための方法論の確立を目指して、追究を行う。